

# 展 望

J Aの進むべき道



## だいじょうさい 大嘗祭に向け稲作の重要性について考える

今年<sup>こ</sup>は平成最後の年で、新しい年の幕開けである。改めて、わが国について考えてみる機会ではないか。

日本神話は、天照大御神さまが孫のに ぎのみこと たかまのはら とよあし瓊瓊杵命に高天原の稲を授け、豊葦はらのみずほのくに原瑞穂国の食物としたことが稲作の起源として語り継いでいる。米は、天照大御神さまがお授けになられた貴重なもので、われわれ日本人にと

って、大切に神聖な食物であるということである。特に今年<sup>こ</sup>は、秋に天皇陛下が御即位後初めて行われる「新嘗祭」にいなめさいとして、わが国のいちばんのお祭りである「大嘗祭」だいじょうさいが執り行われる。

翻<sup>ひ</sup>って、わが国の米はどうなっているのか。米の消費は、毎年10万t減少する見通しである。米の需給の安定を図るため、適正在庫量の180万tの実現に向け、31年産で最大15万t減らす必要がある。

31年産対策は、昨年末に決定したが、現場は決定前に種子の確保など作付けに向けた準備を進めており、主食用米の需給を安定させるためには、拡充された産地交付金を活用して米を主食用以外の米として生産する必要がある。

また、食料自給率は38%（29年度、カロリーベース）である。これは米の消費が減少し、飼料や原料を海外に依存している畜産物と油



金井 健

(J A全中常務理事)

脂類の消費量が増加したという食生活の変化であるとされている。しかし、長期的には牛肉・オレンジ交渉合意をはじめとする輸入拡大等により低下しており、近年は横ばい傾向にあるとしているものの、TPP11の発効をはじめとする国際化の進展により、畜産物等の輸入増加などによるさらなる自給率の低下が懸念されている。

自給率を上げるためには、和食の推進をはじめとして主食用の消費拡大がまずは必要であるが、現実的には飼料用米や米粉、加工米、備蓄米、輸出用米などの米の生産拡大が不可欠である。このことにより自給率を上げることができるが、最も大事なことは、水田をフル活用することにより、日本人にとって神聖な食物である米を生産する水田を維持することができることである。

米は単なる経済問題ではなく、日本神話から現代まで引き継がれてきた神聖な水田の維持は、わが国の伝統と文化の継承に他ならないものである。今年<sup>こ</sup>はさまざまな行事が行われるが、「大嘗祭」に向けて、いま一度、国民全体で、わが国の平穏と繁栄を祈りながら、わが国における農業の、とりわけ、稲作の重要性について考えるときと思う。